
落書き

いえやす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落書き

【Nコード】

N6172D

【作者名】

いえやす

【あらすじ】

死んだ人が残していった落書きを辿っていくと、そこにはまた落書きがありました。

その古びた廃校は呪われているともつばらの噂だった。

灰黒く汚れた壁、ガラスの割られた窓を見上げながら、剛は改めてそのことを思い出した。

近くで見ると昼間でも結構不気味だったが、壊れたドアから中のぞくと埃だらけの廊下が長く延びているのが見える。

窓からの日差しで視界は良好だ。

剛は覚悟を決めるとおそろおそろ校舎の中に足を踏み入れた。

床板を踏みしめる自分の足音が、静まり返った建物の中でやけに響く。

とりあえず手近な教室に入ってみた。

壁に大きな黒板がかかっているのがいかにも学校らしいが、中は酷く荒れていた。

整然と並べられていたであろう机やイスはことごとくなぎ倒され、さらにはどこかの不法業者が入り込んでいるのか、足の踏み場のも無いほどに、粗大ゴミが散乱している。

テレビ、冷蔵庫、ベッドや絨毯などゴミの中、剛は足元に注意しながら廃棄物の間を見て回った。

剛の目的は金目のものだ。あわよくば換金できそうな銅や鉄の塊が捨てられていないかとわざわざこんなところまでやって来てみたのだ。

ゴミの中を少し漁ってみたが、どうも良い感じのものは見当たらない。

他の教室を探してみようと顔を上げたとき、ちょうど正面にあった黒板が目に入った。

入って来た時は気がつかなかったが、真ん中の部分の埃がそこだけ綺麗に拭われて白いチョークで大きく文字が書かれていた。

『この落書きを見つけた人をお願いします』

文章の最後にチョークでなぜか下向きに矢印が付いていた。

何だろう？

剛は黒板に近づいてみた。すると矢印の指している先が見える。黒板下の壁の部分。そこにも落書きがあった。

『この落書きを見つけた人にどうかお願いします。わたしの話を』

その落書きの最後にもやはり矢印が添えられていた。今度はまっすぐ左、窓の方へ。

剛がなんとはいなしに矢印の誘導に従ってみると、思ったとおりまた別の落書きにぶつかった。

『読んで下さい。わたしはあなたをずっと待っていました』

剛は回りを見回してみた。

もちろん誰もいない。いるはずもない。

その落書きの最後にもやはり矢印があり、窓の下、壁に沿って別の落書きを指していた。そちらの落書きの最後にも矢印が見える。

どうやら一連の落書きは矢印で繋がっている様子だった。剛は矢印を追いかけてみた。

『わたしはいつもこの学校でいじめられ』

『いじめられていました。わたしは一人ぼっちでした。だから』

『だから死のうと思いました。わたしは屋上から飛び降りました。しかし』

『しかし死ねなかった。生きていた。動けなくなっているわたしを見つけた』

『のはわたしをいじめていた奴でした。助けてはくれませんでした。わたしは。』

『助ければ奴のやったことがばれますから。だから動けなくなっているわたし』

『わたしを穴に埋めました。生きたまま埋められました。苦しかったです。そして』

『そして、わたしは死にました』

そこまで読んで剛はふっと笑った。

なんだ。やっぱりただのイタズラか。

矢印は更に続いている。

黒板から壁、柱、また黒板、倒れた机、床へと。

落書きの文字は少しずつ小さくなり、段々と側に行かないと読めなくなってきた。

『苦しかった。今も苦しい。このままで』

『このままでは死んでも死にきれません。だからどうかお願いで

す。わたし 』

そしてまた矢印。

その矢印を辿って教室の中央を横切ろうとした時、剛は急につんのめった。

ずぶりと床が抜け、足下の感覚が無くなった。

たくさんの廃材でよく見えなかったが、床は壊れており、そこに大きな穴が空いていたようだった。

しまった！

身構える暇も無く、剛は穴の中に落っこちた。

穴は深く、剛はそのまま縁や壁面に身体をぶつけながら底まで落ちていった。

「痛い！」

尻餅をついて倒れ込んだ。しばらく痛みが過ぎるのを待って、なんとか身体を起こす。

「痛てててて……」

腰をさすりながら立ち上がった。身体のおちこちに擦り傷ができていた。

しかし狭い穴の壁面に身体をぶつけた落ちたおかげでスピードが緩まり、ねんざも骨折もすること無く穴の底に到達することができたみたいだった。

「畜生！ あんないたずらに引っかかるなんて」

上を見上げた。丸く切り取られた光が見える。

穴は深かった。あそこまで昇るのは一苦労だろうとうんざりした。目が暗さに慣れてくると、回りの様子が見えてきた。穴の内部は石造りの井戸のようだった。

いつたいここはどこだ？

いぶかしむ剛の足先にこつんと軽いものが触れた。丸いものらしく、ころつと転がっていく。

足元に視線を移すと、バレーボールくらいの白く丸いものが見えた。

なんだ？

不用意に顔を近づけたことを一瞬で後悔した。

それは、人間の頭蓋骨だった。

「うわああああ」

びつくりして後ずさると、今度は踵にもさつきと同じく軽い硬いものが当る感触がした。

全身がビクツと震えた。

剛は一旦深呼吸をすると、勇気を振り絞り、振り返って下を見た。

……………。

想像していた通りだった。足元にいつのものだかわからない白骨が転がっていた。

それが理科室の標本でない証拠に、骨はぼろきれのような服を纏っている。

あの落書きの主だ。

剛はそう直感した。

落書きの主は自分を発見して欲しかったに違いない。

こんなところで殺されて、ずっと一人ぼっちだったなんて……
かわいそうに。

珍しくまじめな気持ちになり、剛は骨の前にしゃがみこむと目を閉じて両手を合わせ、しばらくお経らしきものをつぶやいた。
しかし、再び目を開けたとき、剛の頭にちよつとした疑問が浮かんだ。

なんでここには頭蓋骨が3つもあるんだろう？

目の前の状況にちよつと納得がいかなかった。

剛が落ちた穴の向こう側、辿れなかった矢印の先、床の上。
剛にはもう読むことはできないが、そこには小さな文字で、こう書かれていた。

『だからどうかお願いします。わたしより苦しんで、苦しんで死んで下さい』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6172d/>

落書き

2010年10月9日22時45分発行